

総務文教常任委員会会議録

(令和3年11月9日)

愛 南 町 議 会

愛南町議会総務文教常任委員会会議録

本日の会議 令和3年11月9日(火)
招集場所 議員協議会室

出席委員

| | | | |
|-----|------|------|------|
| 委員長 | 石川秀夫 | 副委員長 | 尾崎恵一 |
| 委員 | 池田栄次 | 委員 | 金繁典子 |
| 委員 | 原田達也 | 委員 | 那須芳人 |
| 委員 | 吉村直城 | | |

欠席委員

なし

傍聴委員外議員

議員 少林法子

職務のため出席した者

議会事務局長 本多幸雄 局長補佐 小松一恵

説明のため出席した者

(学校教育課)

課長 岩井正一 課長補佐 猪野啓士郎

本日の委員会に付した案件

(1) 所管事務調査：へき地における学校教育の調査研究

- ①机上審査について
- ②現地調査について
- ③先進地視察について

(2) その他

開会 10時38分

閉会 11時49分

○尾崎副委員長 皆さん、お疲れさまです。

全員おそろいですので、ただいまから総務文教常任委員会を開催いたします。

開催に先立ちまして、石川委員長より御挨拶をお願いいたします。

○石川委員長 皆さん、引き続きお疲れのところ総務文教常任委員会、全員の御出席をいただきまして、ありがとうございます。

へき地における学校教育の調査研究ということで、今回、総務文教委員会のテーマを決めさせていただきました。愛南町のみならず地方においてですね、人口減少というのがかなり進んでいます。それと併せてですね、皆様、報道等で御存知かと思えますけども、全国の小中学校の不登校が19万余りあるというような話もあります。愛南町として、何とかそういう不登校の人も含めてですね、学校を存続するためにどうあるべきかということ論議していただきたいということで、今日は説明員の方に出席していただいてですね、資料等を説明していただきますが、皆さんの活発な御審議をいただけたらと思います。

以上です。

○尾崎副委員長 それでは、早速協議事項に入ってまいります。

これからの進行、取りまとめ、石川委員長、よろしくをお願いいたします。

○石川委員長 それではですね、学校教育課のほうに資料を提出いただいておりますので、資料の説明をしていただきたいと思います。

所管事務調査ということで、へき地における学校教育の調査研究、よろしくお願ひします。

○岩井学校教育課長 失礼します。学校教育課の岩井です。

今日は、教頭職である指導主事の猪野課長補佐も同席させております。よろしくお願ひします。

まず、資料1のほうを私のほうから説明させていただきます。

愛南町の学校の現状というところで載せています。小学校においては、篠山も含めて12校中3校が小規模校ということで、ほかの9校は全部過小規模校ということで、5学級以下の学校ということで、そのうち極小規模校というのが8校あります。それはもう3学級以下の学校になります。後で表等を見ていただけたらと思うんですけども、そういう状況です。

中学校においては、全て小規模校という位置づけになっております。

次、開けていただきまして、まず、へき地における学校教育ということでいただいておりますが、へき地の学校とはどういうものかというところを、ちょっとひも解いてみたいと思います。

まず、へき地学校とは、へき地教育振興法で定められております。これは交通条件から始まって、いろいろなものになるんですけども、これは法上に書かれている交通条件及び云々からそういったところに所在する小中学校ということで、基準等の点数で等級が決められます。

その下に書いてるように、駅とか停留所、そして医療機関とか様々な交通状況とか、役所からの距離であるとか、そういったものを点数化したものが下の表になりますけれども、へき地と学校の級地と算定点数というものになっております。

下にいくほどへき地度が増すといえますか、かなりの地域におるといって、特に3級から下、特に4級、5級ぐらいになると、離島が多いです。そういった感じです。

次のページを見ていただきまして、愛南町内でのへき地等に該当する学校というのが特別の地域に所在する学校ということで、家串小、そしてへき地学校に準ずる学校というのが篠山小中、そして1級に該当するのが僧都小、福浦小というところで、あとほかの学校はこの振興法に定める部分では該当しないというところですよ。

愛媛県でのへき地教育振興会の取組ということで、この県内のへき地等に該当する学校で、県のほうで事務局を持ってこの振興会というのをつくっております。それは振興法に基づいて、いろいろなへき地の学校への振興を取り組むということで、特に上からいきますと、優良児童生徒の表彰であるとか、図画・書写の優秀作品、こういったもので、へき地の学校で学習する

子供たちは、結構表彰があります。モチベーションアップにもなるようなところで取り組まれております。そこにもろもろ書いておりますけれども、そういったものが愛媛県下で、当町もこの振興会に加入しておりますけれども、へき地学校で学習する子供たちへの教育振興というものをしております。

次のページに行かされてもらって、これは過小規模校、先ほど紹介しましたけれども、ここは全部複式学級をしていますので、どういったところが特徴があるかというところをちょっと抜き出してみました。

やはり一人一人が教員と近いので、指導がしやすいという面があったりします。それと、いろいろな活躍の機会が多いといえますか、行事等に出る回数は当然多くなったりします。複式学級となってくるので、異学年の交流が生まれやすいと言われております。また、地域とすぐく、そういった地域が小さな集落、地区にある学校が多いので、地域との関係性が近く構築されやすく、実際構築されてるんですけども、支援が受けやすいというよいところがあります。

逆に同級生が少ない、あるいはいない学年は、友達同士で学び合ったり高め合ったり、これからよく主体的で対話的な学習など言われますが、こういったのがなかなか難しいと。もう既に起こってるんですけども、複式学級の中で飛び学年の場合は、いわゆる学年がゼロの学年があって、例えば1年と3年とか、1年と4年とかというのが実際あるんですけども、これは非常に指導が、発達段階に沿った指導がなかなか難しいというふうに現場では言われております。

学級編制が年度によって変わっていく場合があるので、指導計画等が次年度にすぐ使用できない、これは学校のほうの問題というか課題になっていくんですけども、あと、子供と教員との関係がすごく近くて、信頼関係が深まるんですけども、ちょっと依存的になりやすいというようなことも聞いております。

あと、友達関係が親密になり過ぎることもあったりして、関係が固定化しやすく、またそこで人間関係が崩れると修復が本当に難しくなる、これはクラス替えのできない単級学級などもそういったことがございます。実際に小さな複式のある学校の中でも、これまでも、今現在も、ちょっと起こったときがあるんですけども、言わば人間関係、トラブルになると非常にこれは親も巻き込んで、本当に悪い関係になってしまうっていうか、現実起きています。一般的に小さい学校の少ないところは、いじめとか人間関係にトラブルがないというような見方をされる方もいらっしゃるんですけども、人は1対1でも人間関係、トラブルが起きるときは起きますので、本当に現実的に後での修復は難しいっていうのがございます。そういうところは課題になっております。

あと、資料2のほうに移らせていただきますと、これが現在の小中学校の児童・生徒の人数等です。これは参考までにまた後でも見ていただけたらと思います。

次の横長の資料3のほうになります。今現在の令和3年から令和9年、令和9年までが出生数拾えるので拾っております。右下の、先ほど教育長が退任のときにちょっと触れましたけれども、令和8年の小学校1年生64人、令和9年の小学校1年生57人、これは愛南町全体です。こういう状況になっております。で、中学校についても見ていただけたらと思うんですけども、中学校は割とまだ下から積み上がってくるんで、何とか300人台を保っておりますが、この小学校1年生、令和8年、9年の小学校1年生の子らが今度また中学校になってくる頃には、同じような状況になってこようかというふうに思っております。

割とへき地における学校教育というのは、へき地だからこういう特別な教育があるというところではなくて、先ほどへき地等に該当する小学校等を紹介しましたけれども、それ以外の複式学級のへき地に該当しない学校とどう違うんだという、本来的な日常の学級生活、教育の在り方は変わりません。先ほど言ったような県のへき地振興会などの、いわゆる先ほど言った

ようないろいろな優良表彰とかそういったものが加わるということ。そして、教員にとっては、へき地等に、へき地学校に該当する場合は、へき地に関するような手当がつくというようなところが、ほかの学校に勤務する教員とは違うというところです。

ちょっと駆け足ですけれども、私のほうからは以上とさせていただきます。

○石川委員長 ただいま説明が終わりました。

質問のある方、挙手をお願いします。

那須委員。

○那須委員 篠山小中学校を除いてですね、ほかはもうほとんど、ほとんどというか全員愛南町の子供たちなんですか。昔は内海中学校なんかは宇和島から内海中学校のシーカヤックをしたいとかですね、来たいということで、宇和島とか宿毛とかという地域、町外の子供たちが来たんですけれども、この中にはおられますか。

○岩井学校教育課長 このへき地の学校としてここに書いているところにはございません。篠山を除いてになるんですけれども、言われましたが、篠山についてはですね、その校区である山北以外の宿毛市から来たりはしています。その小さい学校でやりたいということで、そのほかに、中学生などになると部活といいますか、剣道をやりたいということで、宿毛から今年度来た子がおります。来たといいますか、住所地は城辺のほうに移してきたりしております。

また、一本松についても少しおるようです。その一本松中学校にということで、割と愛媛の教育をっていうような感じで、その住所を移して来られる方がぽつぽつおります。

逆にへき地の学校はちょっと除いた話になっていくんですけど、やっぱり南中に、中学校から行く子なんかはちょっと増えてきているっていう状況です。

○石川委員長 何人ぐらい。

○岩井学校教育課長 今年度といいますか、令和3年の年度当初については、多分10人程度ぐらい行ったんじゃないかなど。

実はその中で困ったのが、ある中学校の子が南中に何人か抜けて、本来2クラスになるところが1クラスの数に地元ではなっちゃって、ただ先ほど言ったように宿毛から剣道がしたいというて来てくれた子がいたので、2つに分かれたというケースがありました。だから、40人学級と、中学校1年で20人の学級に分かれるのでは全然環境が違うので、そんな行き来が起こるとそういうことが起こります。

あともう一つ、ちょっとお伝えし忘れたんですけれども、先ほど言った極小規模校、へき地にある学校もほかの極小規模校もよく起こるんですけれども、大体みんな3学級とか2学級になるんですが、複式に関しては。そうなったときに、子供の1人の入学するかしないかで、教員の数が変わってきます。例えば3学級で16人学級のときは、教頭、教諭の人数が4人なんですけれども、それが1人減って15人の3学級になると、教員が1人減ります。学級数は変わらないのに教員数は減るとか、たった1人でですね。それで3学級でさらに子供が11人っていうことになると12人を切ると教頭職が引揚げになります。さらに2学級になると養護教諭が引揚げと、もう既にそういう学校は存在してますし、来年度もそういう学校、本当に1人入学の予定のところ、今ちょっとそこがどこか違うところへ行きそうだというような情報も入りかけてて、それによって教員数が大きく、1人の教員が減るっていうことは、小さい学校ほど本当に大きなことなので、そういったことは絶えず起こっています。

○石川委員長 金繁委員。

○金繁委員 すみません、養護の先生は何クラスになったらいなくなるんですか。

○石川委員長 学校教育課長。

○岩井学校教育課長 2クラスです。

○金繁委員 2クラスになるといなくなる。

○岩井学校教育課長 はい、複式学級がくくられていくときに、飛ぶ学級があったら2クラスにな

るので、そうなったら養護引揚げです。

そういったときの対策として、非常勤的なものが、枠があれば、あと人がおれば、今実際つけてるところもあるんですけど。あと苦肉の策として、2つの学校を兼務してもらおうとかいうことを、実際、ここ数年しています。

○石川委員長 金繁委員。

○金繁委員 分かりました。生徒さんの全体の数はどんどん減ってるんですけども、特別支援の必要な子供たちっていうのは増えているとも聞くんですが、割合的に。その養護の先生が2つの学校を兼務という中で、現場はかなり大変な状況ではないかと想像するんですけども、その辺の現状と、それから今後についてお聞かせください。

○石川委員長 学校教育課長。

○岩井学校教育課長 これもすみません、申し添えるのを忘れてましたが、愛南町独自で教育支援員ということで、複式学級のほうには、ある学校には1人ずつ配置しています。これはもう何年前やったか、平成25年か6年のときにこの総務文教常任委員会のほうにそういう相談をさせてもらって、そういう町が雇い上げて支援員を配置させてもらってます。

あと、もう一つの教育支援員が特別支援の支援員で、これはやっぱり特別支援、配慮の必要なお子さんのいらっしゃる特別支援学級であったり、普通学級を希望して入られるお子さんもいらっしゃいますので、そういった学校の状況に応じて、そういった支援員を特別教育支援員を配置しております。

現在、人数は複式教育支援員のほうは9名です。あと、特別支援教育の支援員は全部で25名です。常勤です、みんな。他の宇和島管内のところでは、いわゆるパート的に時間で雇い上げてるところがございまして、そこで何が起きるかという、いわゆる担任とのやり取りが十分準備等ができない、常勤にさしてもらおうことで、そういう打合せであるとかどのような方法でやっていくとか、そういった週案であるとかそういった計画の中で打合せしながら、愛南町の場合はさしていただける体制をお許しいただいているという感じです。

○石川委員長 聞くところによると、支援員の方が固定化してですね、担任の先生は何年かに1回替わられるということで、固定化してなかなか人間関係がですね、担任と支援員の間で難しいような話も聞いたりするんですけど、現場でそういう話は、課題というのはあるんですか。

学校教育課長。

○岩井学校教育課長 実際に支援員と担任の関係性が悪いついていうのは、余りこちらの耳には入ってきていませんけど、子供との相性とかあって、ほかの全体的な学校内での、先ほど支援員同士とかそういうのは耳に入ったりすることがあるので、そういった場合には、当然異動時期にいろいろ工夫しながら、実際限られた場所になるので、そういったところは気をつけながら、異動のときには気を付けていたりしています。

当然、人事評価等もしていきますんで、校長からの情報なんかも得た場合は、そういう十分配慮して考えていってはおりますが。

○石川委員長 この過小規模校の特色の中で、同級生が少ない、あるいはいない学年は友達同士で学び合い、高め合うことができにくいということですけども、その技術的な問題もあるとは思いますが、その前にちょっと御提案させていただいたのは、愛南町ではこの複式学級を1つの学級とまとめてズームであるとかいう教育形態は取れないのか。技術的な部分はクリアできるとは思うんですけども、先生の対応が取れるのかどうなのか、そのあたりちょっとお聞かせいただけたらと思います。

学校教育課長。

○岩井学校教育課長 現実的には非常に難しいと思います。例えば、複式学級同士が交流したり、交流学习とかいうのはできるとは思いますけれども、例えば1年の学年を結んで、じゃあどのように学習するんだっていうと、教育の進み具合も違いますし、その個々によって。それをまた

例えば飛び学級もあったりするんで、教員がそこまでできるっていうのは、難しいと思います。正直言いました。

○石川委員長 例えば、その今言われた支援員の先生方が、先生方と一緒にサポートに入るというようにことも可能なんじゃないかなというふうには思うんですが。

学校教育課長。

○岩井学校教育課長 支援員はその学校において1人しかいませんので、複式学級においてはですね。で、そういった場合に、やはり支援が特に必要な学級を渡り歩いて行くような格好なので、絶えずどこかに固定しているっていうところではないので、なかなかそれは現実的に難しいというふうに考えています。そこは学校現場に聞いてもちょっと無理だというふうに、無理というか非常に難しいというふうに聞いております。

○石川委員長 尾崎副委員長。

○尾崎副委員長 その特別支援学級の先生、生徒と当然マンツーマンですとずっといくんですよ。マンツーマン、1人に支援員が1人つく。

○石川委員長 学校教育課長。

○岩井学校教育課長 学級が今特別支援学級は知的障害の学級、そして情緒・自閉症学級があります。学級ができたなら担任がつくので、担任がおります。ただし、その1人学級であれば1対1になりますけれども、特別支援学級のくくりが8人までは1人の学担が持つようになります。どうしてもそんだけ複数いると、そういう配慮の必要な子が複数いると、支援員を必要に応じて、どこまで割り振るかっていうことになるんですが、そういった場合はさすがに1対1の人数というのは難しいっていうのが現状です。

ただ、愛南町の場合は先ほど紹介させていただきましたように、特別支援の支援員は25人配置させていただいているので、実際、もうこれ以上配置するのは人員的にもその募集してもという部分等、非常に難しい部分はあるんですが、特別支援学級の教員数と支援員数を足した場合に、特別支援学級にいる子の人数と大体同等ぐらいはいるんですが、先ほど言いましたように、普通学級にもそちらを希望して在籍するお子さん、そして非常にグレーゾーンといわれる配慮が必要だけど特別支援学級までではない、ただ、非常に目をかけてあげないとけないところにも配置していくので、ですから1対1っていう対応までにはなっていないです。

○石川委員長 尾崎副委員長。

○尾崎副委員長 一般のクラスの中に、特別支援の子が入って、そしてその担当の先生も一般のクラスの中に支援のいる子供と一緒に入って横で教えるというふうなことはあるんですか。

○石川委員長 学校教育課長。

○岩井学校教育課長 学校に応じて、その人員を何人必要かということ年度初めにというか、大体年度の終わりに来年度のしますので、ですから支援員が普通学級に入ってやることはありますが、支援員はあくまでも教える立場ではないので、授業はできませんので、いわゆる先生の補佐というような形で数人を声かけしながらっていうような形になってます。

(発言する者あり)

○石川委員長 資料の説明について、質疑ありませんか。

(「なし」と言う者あり)

○石川委員長 ないようでしたら、次の議題の現地調査についてということで、現地の学校に赴いて今の状況を、説明していただいた内容を含めてですね、どこの学校にいつ行くのかというような方向で、学校給食も食べたらいいんじゃないかということも言われていた委員もいらっしゃいますんで、このあたり、日時と調査場所、小学校なのか中学校なのか含めてですね、1か所なのか2か所なのか含めて、どういう形で進めていきたいと思いますか。

まず、今コロナの状況で、この総務文教常任委員会が現地の小学校、中学校に行くことが可能なかどうか、そこのあたりをまず。

学校教育課長。

○岩井学校教育課長 この委員会の人数であれば、十分スペースも取れますし、問題ないかというふうに考えます。

○石川委員長 原田委員。

○原田委員 今回、この所管事務調査なんですけど、12月の定例に報告をするのか、それともまあ継続ということも考えられるんですが、委員長の考え、どういう考えですかね。

○石川委員長 日程的に12月の本会議までに間に合わそうとすれば、11月の末までにまとめ上げる必要があるんで、かなり難しいんじゃないかなというふうに思ってます、継続審査をせざるを得ないんじゃないかなというふうに、私は考えています。

皆さんの御意見ありましたら。

(発言する者あり)

○石川委員長 継続審査の方向で構いませんか。

(「はい」と言う者あり)

○石川委員長 事務局のほうとして、何か現地調査について、日程の案とか場所とかあったら、事務局長。

○本多事務局長 事務局のほうとしては、継続審査ということであるならば、特にそういった日程とかについては考えておりません。

以上です。

○石川委員長 那須委員。

○那須委員 日時とか対象校にしても、学校によっていろんな行事もありましょうし、時間的に取れないというのがあるので、委員長、副委員長にお任せします。

(「賛成」と言う者あり)

○石川委員長 ただいま、那須委員より御提案いただきました、日時、調査場所については、委員長、副委員長に一任という御提案がありました、それでよろしいですか。

(「はい」と言う者あり)

○石川委員長 それでは、委員長、副委員長のほうで決めさせていただきますんで、よろしく願います。

続きまして、先進地視察でございますが、資料がついてますんで、これの説明を。

事務局、よろしいですか。

事務局長。

○本多事務局長 資料なんですけども、これにつきましては、先般の中で砥部町の山村留学センターという話が出ましたので、その資料につきましては、インターネット上の資料をちょっと用意させていただきました。

内容についてはお目通し願いたいと思います。

以上です。

○石川委員長 砥部町の山村留学センターの資料をつけておりますが、委員の方でここがいいんじゃないかとか、こういう面白いことをやっておるところがあるんで、ここへ行ったらどうやというような御意見がありましたら。

場所も含めてですね、どうするか決めて行かないといかんと思うんですが、御意見ありましたら。

吉村委員。

○吉村委員 これ愛南町で、本町にとって、こういうことを参考にして将来のこの学校のあれを検討するとかいうんだったら、視察する必要もあろうかと思うけども、そういうふうなあれは全くないし、実はこの山村留学センター、名称はあれやけども、今の町長が初めて出た時に篠山小学校を交流センターにするという公約で、これが出たんやけども、出しただけでそのまま済ん

でもたと。そういう過去もあったんで、言うだけで。必要はないんじゃないかなと、将来的に取り入れるのであればですよ。

○石川委員長 原田委員。

○原田委員 私もこの山村留学には余り、今まで聞いたこともないんですけど、課長これ、砥部町がこれやっとなんてみたいなんです、これは何年前からやっとなんて分かんのですが、これの成果ですね。成果、メリットとかそんなの実際出とるんですかね、ちょっとそこらあたり知りたいんですけど。

○石川委員長 学校教育課長。

○岩井学校教育課長 申し訳ありません。この資料に関しては、私どもが調べて持ってきたものではないので、その成果っていうところまでは存じ上げてないです。先ほど吉村委員のほうからもちろっと出ましたが、これまでの議会答弁とか、前回、平成元年度にここで行われた所管事務調査の中でも、山村留学っていう話が出ましたが、答弁させてもらった部分では、学校を存続させるための山村留学というのは、ちょっと考えていないですという答弁を今までずっとさしてきていただいております担当課のほうでは。

委員長、すみません。これ聞いていいものやらどうやら分からないんですけど、前回の所管事務調査からの流れなんかで、私非常に迷ってるんですが、その辺、お伺いはできませんよね、私の立場では。

○石川委員長 前回というのは、これ過去の。過去は分からないんですけど、私も。

原田委員。

○原田委員 今、前回の総務文教の所管事務の話が出たんですけど、方向としたら、言うたら学校統廃合を進めようという調査やったんです前回は。ですから、こういうふうに小さい学校を残そうというこの山村留学とは、ちょっとかけ離れとるところがあるということなんで、そこらあたり、総務文教としてどういう方向に持って行くのかなということ、今課長が言うたと思うんですよ。あくまでも今度答申も出ましたし、やっぱり統廃合を今後進めていくべきではないのかなというふうに、私は考えとるんですけどね。どんなものでしょうね。

○石川委員長 今、出された資料にもですね、令和9年には1年生が50人ぐらいになると、57名ですか、ということで、今の答申自身も、もし統廃合に進むのであれば、小学校1校とか中学校1校というような規模ベース、規模ベースだけ考えれば諮問した内容も含めて答申されたその意味合いからすれば、規模だけを捉えていますので、本当にこれで愛南町の将来、本当にこんなままでいいのかどうかということ、やっぱりここで一回立ち止まって考える必要があるんじゃないかなということで、私はこのへき地における学校教育の調査研究ということで、皆さんに同意をいただいた次第でございます、令和9年、もう数字は確定的なもんなので、統廃合にそのまま進むのか、それとも何らかの方法でせつかく文科省から小学校、中学校、許認可頂いておりますんで、それを残すのかどうかということ、やっぱり一度愛南町自身ももう一回、この総務文教委員会が提案できるような、政策を提案できるような形ができないかなというふうに、私の思いはあるんですが。

吉村委員。

○吉村委員 結局順序からですね、教育委員会に答申が出てきたと。そして、教育委員会、あれ教育長答弁やったと思うけども、それに基づいて議会の皆さんと相談して、今後、していきますという答弁やったと思うんですけど、その中で、今うちばかりが先走って、ここまでやなしに、まだ教育委員会として答申が出てきて以降、内部でどういう方向であれしよるのか、まずそれちょっと聞いてから。

○石川委員長 学校教育課長。

○岩井学校教育課長 ちょうど今吉村委員から御提言いただいたように、今の動きの状況をちょっと報告して、後でいただこうかなと思いましたが、今させていただきます。

あれから答申書をもって教育委員会の中でも確認した上で、動きを今どうするかというところで、まずは保護者に、各学校の保護者に答申の内容について説明に回ろうということで、あれが10月の最初から回り始めて、ちょうど先週の11月5日金曜日で、最後は篠山小中学校を回ったんですけれども、それで全ての学校に回らせていただきました。保護者の方に集まっていたいて、今回の、大きなところでいくと小学校については各旧町村に1校、そして中学校についてはまず2校にというような、その理由等も答申が出た理由等も御説明に回らさしてもらいました。

中には残してほしいという意見、少数、正直ございました。反対って言った方は1名いらっしゃいましたが、あとは出席された方の多くは、賛成っていう意見と、もうこれはやむを得ないねと、あとは場所の問題どうなるんですかとか、あと通学手段、スクールバス等は大丈夫なんですとかいうような御質問をいただいております。こちらから返答できているのは、まず通学手段については、何らかの方法、まずスクールバスを中心にして、いろいろな手段をもって、そこは通学保証はする必要があると考えているという部分と、あと場所については、やはり非常にこれはデリケートな問題なので、PTAの方々とも再度、再度といいますか、今後も話し合っって進めさしていただきたいというようなことで、今、終わったところです。

今後また、保護者等とのそういう意思、コンセンサスが得られれば、今度は地域の方々に声かけして、答申の内容、保護者とのやり取りの内容というようなところを説明した上で、御理解いただけるような方向でやっていきたいと。それが大体進みましたら、計画を策定していくと。計画策定段階で、進捗状況等も議会のほうには全員協議会等の場面でお伝えしながら、計画素案等はこういうものにしたいというのは、また御提示して、御意見を頂けたらというふうには、今の段階では考えております。

年度が今年度中に何とか策定をという思いがあるので、非常にタイトなスケジュールになるうかとは考えております。

○石川委員長 吉村委員。

○吉村委員 ということは、まだこれ今日のあれで、教育委員会から、課長のほうから委員会に報告があった、報告というか質問に対して今はそういうあれがあったと。全員協議会でまだやってないということでしょう。まだやっていないというのは、今の説明聞きよったら、だから議会に相談しながらということが、多分、前、町長の答弁もそうやったと思うんやけども、それを議会ばかりが、議会というか委員会が検討するのは一つの方法やけども、先進地、この留学の部分でそこまで踏み込むべきかなとは、私は思うんですけどもね。踏み込む言うたらおかしいけど、行く必要があるのかなと。

○石川委員長 新しい教育長にもなって、11月の16日から任期が始まるということなので、新しい教育長の下でどういう計画になっていくのかっていうのも、はっきりしてこようかと思いませんんで、また、方針が変わるかもしれませんし、進んでいくかもしれませんし、それより加速的に。

金繁委員。

○金繁委員 答申が出て、今年度中に再編計画を決定していく方向というのが分かったんですけども、これそもそも答申が出た、私、議事録を探したんですけど、議事録、オープンにされていないですよ。それと、地域、それから保護者の皆さんとの意見交換会等の主なやり取りとかも、少し既にされてるようなんですけども、その記録もオープンにされていないですよ。やっぱりこれ、保護者だけじゃなくて地域地域にとってもとても重大なことなので、やっぱりそのプロセス、それからどんな意見が出てきたかというのは、明らかにして、議員でさえ知らないような状況ですから、それはホームページにしっかりと載せていただきたいと思います。

ちなみに、数年前に私総務文教委員会だったときに、四万十市にこの学校再編について視察に行かさしてもらいましたけれども、そこはもうそのプロセスをしっかりと教育委員会のホ

ームページに載せています。保護者や地域の方の意見もしっかり載せてます。やっぱりそのオープンな議論というのをしないと、もちろん議会でもしないといけないですし、やっぱりそういう情報がないと私たちも議論できないんですよ、その前提がないので。その基礎資料を頂きたいということを、まず私は要望します。

今後の学校編制何ですけれども、一応答申が出て年度末までに決めたいということですが、私は山村留学という状況、どういう可能性があり、どんな効果が、学校だけではなくて地域にも出ているのかということを知ることがとても大切だと思います。今までは子供だけが留学したりとかというのが主だったと思うんですけども、今はもう別に都会にいなくても地域地域でリモートワークができる時代になって、田舎回帰っていう、田園回帰っていうのが物すごく増えてきています。それに伴って、親子での山村留学も、親も一緒に移住して留学と、子供が留学するという人たちが最近、去年は1割も増えたという情報もあります。

でするので、その可能性を探るといのは、愛南町、学校だけじゃなくて地域の活性化という意味でも大事だと思うので、この中でするか再編の中でするか、また別の総務の移住促進とかでするかは別として、私は大変興味があり、やったほうがいいのではないかと思います。

○石川委員長 学校教育課長。

○岩井学校教育課長 今、金繁委員から御提言のあったプロセスであるとか、その議事録の公表に関しては、ちょっとタイミングを見させていただいて、まだ地域の方々ともお会いしてないので、さしていただけたらなというふうに考えております。当然、議会のほうにもその辺は報告していきたいというふうに思っております。

やっぱり、全体的なアンケートとか、いろいろな意見を聞けば、小さくても残してほしいという意見も当然あれば、早く統合してくれという意見もあったり、一番多いのはやはりこの子供の人数になると致し方ないだろうというようなところは、7割近くという感じになるだろうかというふうに感じております。

答申の中にあるように、小学校については旧町1か所ずつと委員さん方が答申にまとめられたのは、いろいろ意見、グループワークでずっとやっていただいたんですけど、やはり3校でいいんじゃないかとか、やっぱりもうあるところは無理やから、複式解消は無理だから4校じゃないかという意見も当然出ました。しかし、やはり地域との関係性を考えると、1校ずつは、1校ずつっていうのがいいんじゃないかというところでまとまっていった経緯を、協議の中で見ております。

中学校においても、以前の2年前の総務文教委員会でも中学校は1校でいいんじゃないかということも、いろいろ御提言いただいたんですけども、やはり1校になると町内でやり取り、いわゆる競い合うじゃないですけど、学習にしてもスポーツ面にしても、やはり対戦するとか、そういう相手がないのはっていうことで、まずは2校が妥当なんじゃないかというところに落ち着いております。当然、答申の中にもありますけれども、その後の再再編っていうのも、将来的には当然視野に入れておく必要があるというふうには、事務局側では考えております。

以上です。

○石川委員長 先ほど言われた、年度内に策定計画をつくられるというのは、もう教育委員会の中でほぼ固まった意見だということでしょうか。

○岩井学校教育課長 答申でもそういう提言をいただいております。スケジュール的に非常にタイトなので、先ほど言ったようなコンセンサス等がどこまで得られるかによって、例えば年度はその後の協議であるとかいう表記になる可能性もあるでしょうし、どうしても合意形成が得られ切れないということになるとずれ込むことも考えられますが、何とか事務局としてはそれを目指したいということを考えております。

○石川委員長 尾崎副委員長。

○尾崎副委員長 その学校統廃合の案が出て、ここにあるのやけど、保護者からはもう既にアンケートの中での賛否は取っとるわけですよ。今、説明会に回って、次に住民の説明会行くと。住民の説明会のアンケートの予定はないんですか。

○石川委員長 学校教育課長。

○岩井学校教育課長 もう住民からのアンケートは取る予定はございません。あくまでも保護者の意向等を、以前のこの総務文教でも御提言いただいたように、まずは子供の教育環境をということですので、一番将来の子供の責任を持てるのは保護者でございますので、住民の方々が幾ら学校を残したいという思いはわかりますけど、じゃあ子供の将来においていわゆる今からのこの激動の時代を生き抜く子供への責任っていうのは、やはり保護者にあるかと思っておりますので、保護者の意見を尊重するという、子供の教育環境を重視してということ、これは前回の総務文教常任委員会の報告書の中にもそういった趣旨のことが書かれておりますので、そこは私どもも十分踏まえて、そういった形で進めていきたいというふうに考えております。

地域の方とはもう意見交換の中で、理解を得るという方向にしたいと考えております。

○石川委員長 学校も地域が支えている部分もありますんで、その地域の人にアンケートを取らないと、ヒアリングだけするというのは、いかがなものかなというふうには思うんですけど。

それと、保護者はずっと保護者じゃない。地域に残っている方のお子さんが帰ってきてですね、将来の保護者になれる方もいらっしゃる。そういう意味では、やっぱり地域の人にアンケートを取るべきじゃないかなというふうには思うんですが。

学校教育課長。

○岩井学校教育課長 2月のときにアンケート取ったのは、就学前の保育所、幼稚園へ行っている全ての保護者、そして就学中の小中の全ての保護者にとっております。将来的な地域の方になり得る人たちには取っているんで、それでいけるんじゃないかなというふうに考えております。

以上です。

○石川委員長 私が言ったのはですね、将来今の中学生、高校生が帰ってきて、子供を産み育てるということも含めての将来の保護者という考え方なんですけど。

○岩井学校教育課長 今の小中学生が戻ってきてということは、今の保護者の意見を聞いているということになりますので、問題ないかというふうに考えます。

○石川委員長 吉村委員。

○吉村委員 あのですね、今のあれを聞きよって、ちょっと思い出したんですけども、ちょうどまだ合併前の、多分初めてやったと思うんですけども、上大道小学校が閉校の前に、ちょうど私が一本松で総務委員長しよったときやったと思うんですけども、教育委員会のほうで地元へ赴いて行って、地元の人といわゆる保護者の人とディスカッションしたという報告があって、じゃあ議会も一緒に行こうやないかということで、じゃあ議会の中で総務委員会が行けということで、当時の委員会に行ってからアンケートというのは、ある意味で言うたら無責任なんですよ。

膝を突き合わせて地元の人と7回ほどやったことがあるんですよ。確かに強烈な意見も出ました。ほんで地域からあれになったら寂れる一方やと、相当なあれも出たんですけども、最終的には要は地元の人で決めてほしいということで、地元の人でもまあ子供の将来を思うたらいふことで、特に個人名出しとうはないんですけども、有力な方が大分言われよったんですけども、やっぱり孫かわいさに孤立させたくない。やっぱり競争社会、これからの時代にいうことで、あれ急遽統合ということで決定、あれ建ててから年数そんなにたつてなかったんですよ。あの新築してから、上大道小学校は。そういう経過を思い出したんですけども、それとちなみに実はちょうど篠山の学校をというときに、ちょうど私議長やったんで、これも一緒に地元へ行つたんですけども、正直石をぶつけられました。地元の方から。本当に家にまで来てや

られたんですけども、我々は主導したわけじゃない、ただ要は当時ですよ、今の課長知つると思うけども、一本松町議会は小学校は一本松小学校に統合ということで結論は出したんです。その結論に対する石をぶつけられたという経緯があったんですけども、政治的な、町長戦も絡んだりどうのこうのがあって、最終的に統合にはならず、そして併せてあそこは組合立ですんで、一本松があれをしても宿毛との分があると。宿毛の当時の市長は、愛南に事務局があるので、従うということやったんですけども、理事者がそういうことで統合せずにということになったいきさつがあったんですよ。

だから、篠山の件はちょっと余談としても、上大道小学校がいうときに、これアンケート、アンケートというのは、案外無責任です、正直。やっぱり出ていってから、だったら膝突き合わせてあれするのが、行政が、行政というか行政側がしようし、委員会やったら委員会も出向いて行って、住民の意見を聞いて、我々は住民の代弁者でしょう。そういうことです。

○石川委員長 ほかに御意見ありませんか。

今の御意見はですね、学校教育課がですね、説明されたその統廃合についてですね、対象地域、委員会でも行ったらどうやというような御意見だったと思いますが、この件に関して御意見ある方。

(発言する者あり)

○石川委員長 学校教育課長。

○岩井学校教育課長 今回の統廃合の話になっているので、そこでいきますが、先ほど少し触れたんですが、順番としてはまだ保護者の全てといたしますか、合意が完全に取りれているわけではないので、その辺をまず確認した上で、また地域住民の方々に集まっていただく機会を設けて、先ほど言った吉村委員が言ってくださったように、膝を突き合わせてその方々の意見を聞きながら、理解を得た上で、当然、途中、随時進捗状況は議会のほうにも報告させていただいて、そして素案を策定していくと。そういった中で、素案についても御意見を頂いて、計画という形になっていけばというふうに事務局のほうでは考えております。

以上です。

そして、議会のこういった委員会のほうがまたどう動くかは、またいろいろ御指導いただいて、共同できるところは、また御協力いただいたらありがたいかというふうに考えております。

○石川委員長 原田委員。

○原田委員 時間も大分経過したんですけど、この先進地視察ですよ。この砥部町に行くかどうか。今回のこの調査のテーマが、へき地における学校教育の調査なんで、この中に学校の統廃合も入ってはいるんですけど、実際へき地の学校がどういった教育に取り組んでるのかっていう、それを見に行くのもいいんじゃないかと私は思うんで、これ行ったらどうでしょうかね。

○石川委員長 砥部町の山村留学センターへですね、視察に行く御意見が多数じゃないかと思いますが、時間も来ていますので、決を採ったらどうかとは思いますが。

よろしいですか。

池田委員、何か今日はちょっと発言されてないようなので。

○池田委員 すみません、皆さんの意見聞いて頭の中こんがらがっておるんですけど、ちょっと説明が下手くそやとは思いますが、吉村委員言われたように、そういう今の統合で進んでいるということで、山村留学センターが砥部町にとってどういう位置づけであるかっていうことも考えないといけない。今の目的というかへき地教育における学校教育の調査研究という目的にとってはですよ、ただ砥部町がそういう目的であれしとるのか、愛南町が今度統廃合を行った後で、例えばその統廃合された跡地の学校とか施設等を利用して、こういう山村留学センターっていうものを運営していくのがいいんじゃないかというような目的で視察するんなら、それは意味があるっていいですか、と思いますが、何かへき地教育における学校教育の調査研究としては、ちょっと今いろんな過去の話とか、今、そういう答申の進め方とか、教育委員会の

進め方とかを伺った範囲では、ちょっと目的が外れとるかなという印象を受けました。

○石川委員長 御意見も出尽くしたようなので、決を採りたいと思います。

砥部町の山村留学センターにですね、視察に賛成の方は挙手をお願いします。

(賛成者挙手)

○石川委員長 賛成多数で、視察地、砥部町山村留学センターに決定いたしました。

日時については、また別途皆さんに御相談させていただきたいなというふうに思います。

以上なのですが、その他で何かありましたら。

ないようでしたら、これで終了します。ありがとうございました。

○尾崎副委員長 以上で閉会といたします。お疲れさまでした。

総務文教常任委員会委員長